

# 中山砦

山梨県北巨摩郡武川村中山砦発掘調査報告書

武川村誌編纂室  
中山砦発掘調査団

## 目 次

序	
1. 位置・地形	2
2. 歴史環境	3
(1)『甲斐国志』の記述	3
(2)地域の歴史	3
(3)砦の守衛	5
3. 調査の経過	6
4. 層序	7
5. 中山砦の概観	8
6. 造構	14
7. 造物	15
8. まとめ	15

## 例 言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡武川村三吹中山30番地に所在する中山砦の発掘調査報告書である。
1. 調査は、村誌編さん事業の一環として計画され、1981年（昭和56）3月26・28・29日5月3～5日を中心に実施されたが、その後、数次にわたる測量調査を行っている。
1. 調査団は、甲斐丘陵考古学研究会を中心に組織した。
1. 本書の執筆・編集は調査団で行い、文責はそれぞれの文末に記した。なお、編集は、畠大介・伊藤正幸両氏の協力を得た。
1. 本書に使用した実測図の作成は、出月洋文・八巻与志夫・信藤祐仁による。

# 序

武川村は、文化財の宝庫であります。国の天然記念物「山高の神代ザクラ」・「万休院の舞鶴のマツ」をはじめ、史跡・名勝にも富んでいます。

その一つ、村指定史跡「中山塙」は、下三吹地区にある中世の烽火台を兼ねた山城で、武川衆武士団がその拠点とした所であります。

当村は、昭和54年以来、村誌編纂を進めています。その資料整備の目的もあって、史跡中山塙の学術的調査を計画しました。

昭和56年、村史跡中山塙の発掘調査團を組織し、代表調査員には山梨大学名誉教授磯貝正義先生を迎へ、甲斐丘陵考古学研究会々員諸先生、ならびに地元下三吹地区的武蔵区長ほか、役員、有志各位のご協力を得て3月から5月にかけて発掘調査を行い、引き続き研究を進めていただき、報告書発刊の運びに至りました。

いま、県下には中世の城館址と推定される遺跡が300余か所ありますが、多くは未調査のままで、中には荒廃に委ねられているものもあり、また開発の名のもとに破壊にさらされているものもあります。

このような時に当って実施された中山塙の調査は、従来の文献中心の研究方法にあきらまらず、考古学的方法による発掘調査を実施するもので、画期的研究として、その成果が期待されているものであります。

したがって、その結果は中山塙の歴史的価値の解明というに止まらず、この山城の教育的・学術的活用への道を開いたものとして、高く評価されるべきものと考えられます。

終わりに、この発掘調査にあたり、公私多端の際に多大の困難を克服して作業にご協力下された調査団員諸先生、また農繁の間をいとわず、絶大のご協力を賜わった地元下三吹区の各位、ならびに村教育委員会・文化財審議委員・村誌編纂室職員各位に、心より感謝申し上げる次第であります。

昭和59年3月

武川村長 萩木滋男



P.L. 1 中山塙から諏訪町を望む

## 1. 位置・地形

中山砦は、武川筋の中央よりやや北にある中山の頂上に築かれた中世の山城である。

中山は、武川筋の三吹・台ヶ原・白須・横手・柳沢・山高・牧原など、諸集落に囲まれているためその名があり、南に大武川、東に釜無川、北に尾白川を廻らし、標高 887 メートル、山麓三吹との比高 357 メートルにおよんでいる。

中山山頂からは北に八ヶ岳とその広大な南麓、東には茅ヶ岳と塙川流域、南には遠く甲府盆地、西には甲斐駒ヶ岳等の南アルプスの山々を一望することができる。また、この中山の西には、横手から白須へ通ずる中山峠があり、東には現在の国道20号線（信州往還）が通り、眺望がすぐれているとともに交通の要衝を占めていた。

さらに付近には、中山の北東に「根古屋」と呼

ばれる平坦地があって五輪塔も散在し、尾白川の東には「古屋敷」とよばれる場所もあるなど歴史的環境に大変富んでいる。

この地域は、日本列島の中央部を南北に横切る糸魚川—静岡地溝帯の南部に属し、信州源訪から白根・赤石山地の東縁を、駿河湾岸岩灘に至る南北に走る直線の地溝に、中山の孤峰がぬっと突出した姿はまことに珍らしい。

中山は、地形学上、地壘と呼ばれる。地壘とは、断層によって両側の地盤が陥落する時、その間に生ずる堤防状の高地をいう。地壘は、烽火台や、山城に利用されることが多い。

地質学上から見た中山は、中腹より上方は新第三紀中新世御坂層群、桃ノ木累層に属し、その岩石は、砂岩・頁岩・泥岩で占められる。中腹より低い部分には、第4紀更新世、古八ヶ岳火山岩、高位段丘ローム層が分布する。

釜無、尾白、大武川の複合氾濫原からの比高



Fig 1 中山砦位置図

が350m余にすぎない地盤、中山は底面が割合に広いため勾配は緩やかで、女性的な山容は美しく、頂上の眺望は雄大である。岩質は砂岩・頁岩質であるが松茸を産し、白須松原とともに松茸の名所として知られている。

(佐藤八郎・八巻与志夫)

## 2. 歴史環境

### (2) 「甲斐国志」の記述

『甲斐国志』古跡部に「中山ノ墓」の記述がある。いわく、「三吹・台ヶ原二村ノ西ニ在り、其ノ裏ハ横手村ナリ、北ニ尾白川、南ニ大武川ヲ番ヒタル孤山ノ巔ニ方四五十五歩ノ墨形存セリ、半腹ニ陣ヶ平ト云フ平地、又水汲場ト云フ処モアリ、麓ヨリ凡ソ三十町許リノ阪路ナリ、三吹トハ筆無川・尾白川・大深沢ニ水ノ会同スル故ニ名トス、台ヶ原ハ三吹ヨリ地一級高シ、根古屋・古町・古里布・花木ナド云フ地名アリ、又東ニ甲斐国坂ト云フアリテ釜無川ノ瀧ヘ下ル、花水橋・花水坂ノ隣口ハ古ノ公道ナレバ此ニ対セル亭候ナリ、天正壬午御対陣ノ時ハ武川衆コレヲ簪固ス、家忠日記八月廿九日ノ条ニ武川ノ土、花水坂ニ戰ヒ、北条ノ間者中沢某ヲ討取ル、山高宮内、柳沢兵部、首級ヲ得ル、トアリ」と。中山墓の墓の字は、制限漢字なので、いまは中山砦と記すことにする。記述の内容のうち、巔に方四十五歩の墨形がある、と見えるが、事実は25メートル×90メートル、すなわち15歩に50歩の方が正しい。そこは、けわしく傾斜しているために、到底方形の墨形を構築することはできない。しかし、中腹には平坦な広場があり、ここは陣地を構えたことがあり、それで陣ヶ平といった。水汲場というのは、要砦の直下の谷頭の涓滴のある場所で、勤番上の飲水の汲場である。

天正壬午8月の北条勢と武川衆の交戦に当り

武川衆諸士は、この中山砦の要害を遺憾なく利用して、敵勢を悩ましたことであろう。

### (2) 地域の歴史

中山砦の周辺には古代、令制の真衣郷が置かれた。そこにはどれ位の集落があったのか。

第1に考えられるのは真衣野牧の存在である。官牧経営の庁舎を中心に、牧吏の住居が集落を成したであろう。牧原集落の起源で、現在の集落より西南の高所にあったであろう。

第2には郷民の精神生活を支える社寺を中心とする集落がある。武山八幡宮の武田宮地、源訪明神の脇に起った宮脇集落、牧場の守護仏(馬頭観音)を祀った堂仏寺の集落など。

第3に、真衣野牧の所在地には相違ないが、地域全体が牧場ではなく、大段丘面で水利に便な所には、農耕が行われた筈で、青木・武田・白須・山高などには農業集落が発生した。

元来、令の一郷は、郷戸50戸で成立する。一郷戸の家族員数は、平均20人といわれる。集落とはいっても、小は3、4郷戸、大は7、8郷戸程度の規模ではなかったかと思われる。

やがて、平安朝中期ごろから律令政治が弛緩を始め、国領は貴族・大社寺の莊園と化した。真衣郷もやがて真衣莊に変質、官牧も私牧化されて、真衣野の駒幸といわれ、朝廷の重要な年中行事となっていた毎年8月7日の真衣野牧生産の良馬獻上の儀も、長久3年(1042)までで、以後絶えた。「延喜式」遷進の延長5年(927)から115年後であった。

長久3年より少し前の長元2年(1029)、源頼信が甲斐守となつた。頼信は、平忠常の乱を平定して有名であるが、在任中、逸見郷内に源家の莊園を開拓し、伝領とした。恐らく真衣野牧も源家の私牧化したであろう。

律令制度の崩壊にもかかわらず、莊園内の集



P.L. 2 中山砦の遠景

落は戸口を増し、各地に枝郷を発展させた。

頼信の孫義光は、常陸介となって以来、常陸国に子孫を土着させようとし、長男義業を同国佐竹郷に移らせることに成功した。しかし、三男義清を武田郷に移らせたことは、結果的には失敗で、大治2年（1127）に義光が没すると、3年後に義清の嫡男清光濫行の廉で告発され、翌天承元年（1131）甲斐市川に配流された。父子はやがて頼信遺領の逸見若神子へ移り、父は逸見冠者、子は逸見源太と号した。頼信らの余威はなお存し、義清父子の経営は急速に進捗した。甲斐入国の時は4歳であった清光の嫡庶二子、光長と信義が元服を迎えたころは、武川地方の真衣・武田両荘も支配下に入っていた。清光は、嫡男に逸見諸莊を、二男に武田荘を譲与した。二男は武田荘に館を構え、武田太郎と号した。

武田太郎信義は武勇絶倫の将器で、衆望を荷い甲斐源氏総領となつた。治承4年（1180）9月、加賀美・安田・逸見・奈胡・浅利・曾禰らの諸将を率いて平家討滅に起つた。

信義は、源頼朝に協力して信・駿両国で平氏の軍を破ったが、赫々たる戦功を妬まれて殺され、嫡男一条忠頼は頼朝に謀殺された。

わずかに信義の末男信光が頼朝の信任を得、武田総領職をつき甲斐守護となつた。やがて忠頼の寛もはれ、一条家の再興が許された。そこで信光の四男信長が一条氏をつき、その孫時信は甲斐の守護となり、一蓮寺を開基し、また多くの子を武川の真衣荘内に分封した。時信は太郎信方を山高に、次郎貞信を白須に、六郎貞連を教来石に、八郎貞家を牧原に、十郎時光を青木に、というように割據させた。その結果、一条氏の支流山高氏、白須氏、教来石氏、牧原氏、青木氏らが武川筋に興つた。また青木氏から折井・柳沢氏らが分れ、後世他所から武川の地に封地を受けて土着した米倉・伊藤などの諸氏も武川衆の一員となつた。

武川衆は、武田一条氏の支流の立場を守り、宗家武田氏と行動を共にした。南北朝の争乱にも、北朝（武家方）に属した。宗良親王が白須松原において「かりそめの行きかひじとは聞き

しかど、いさや白須のまつ人もなし」と詠じたのも、武川衆白須氏らの協力が得られない悲しみを、和歌に托したものであろう。

室町幕府が安定した永享5年（1433）、武川衆諸氏は、さきに禪秀亂に敗死した甲斐守護、武田信満の二男信長に協力して、日一揆の拠点日之城にこもったが、敵の輪宝一揆に誘われて荒川に出撃し、大敗して柳沢・牧原・山寺の諸将を失い、打撃を受けたが、柳沢・山寺両氏は青木家から嗣を迎え再興した。

武田信玄時代には、永禄10年、信州下之郷明神において、武川衆のうち柳沢信勝・馬場信盈・宮脇種友・横手満俊・青木信秀・同重満・山寺昌吉ら七士は、寄親の武田六郎次郎（信豊）を通じて連署起請文を信玄に奉った。

武田勝頼の代、武田家は滅亡の日を迎えた。

武田氏滅亡の直前、武川衆は特命を受けて待機していたが、中途計画が変り、活動の機会を失った。織田信長は、勝頼の一族重臣の降る者は木曾義昌・穴山梅雪兩人の外、すべて殺したので、武川衆はやむなく山に潜んだ。

徳川家康は武川衆の幹部米倉忠雄・山高信直・柳沢信俊らを召抱え、遠江に潜居させた。信長が本能寺に滅びると、家康は早速米倉らに帰国して武川衆全員を動員するよう命じた。

北条氏直も中庭を窺い、信州から大軍を若神子に進めた。これより先、武川衆山高信直・柳沢信俊らは北条側の信州小沼砦を攻略し、新府城に陣する家康に謁して勝利を報じた上、中山砦に陣した。氏直は武川衆に使者を送り、服従を勧めたが、信直らは使者を斬り、その首と氏直の書状を家康に献じ、感状を受けた。

北条方は日野台を越えて花水坂に兵を進め、中山砦の攻略をはかった。信直・信俊らは三吹台（中山の東、尾白川段丘）に兵を伏せて敵を破り、首と捕虜を家康に獻じて賞された。

### (3) 畿の守衛

中山の中腹に曹洞宗万休院がある。天然記念物の名木「万休院舞鶴のマツ」で知られる。この寺の開基は、武川衆、馬場民部右衛門尉信成である。馬場氏の所領は白須・台ヶ原・教来石の内とあるが、普提所を中山地内に開いたことで、中山を支配したことが知られる。

また文化年間に編まれた『甲斐国古城跡志』には、中山砦とする明記はないが、「巨摩郡白須村ノ内、城跡宅ヶ所、但、高サ3町半、山ノ上、七手形コレ有リ候、場所ノ広サ相知レ申サズ候、遠見、ノロシ場所ト申伝ヘ候。右、是ハ誰様ノ御取立共相知レ申サズ候。』とあって、これを中山砦に比定して差支えなかろう。

中山の所属は、武川村と白州町に分属し、北西部の半分は白州町に、南東部の半分は武川村に所属しているから、白須村から報告が出されたのは当然である。現在、山頂の砦の部分の地籍は武川村下三吹に属するが、文化の頃は白須村の権力がより大きかったらしい。

中山砦を築造したのは誰か、恐らく白須氏か馬場氏であろうが、確実なところ判らない。

この山城は、亭候すなわち望楼を備えた烽火台で、要害を兼ねた。烽火台は、櫓を構えて烽火（のろし・とぶひ）を擧げる台である。中山砦の東にある日野台も古代、烽火台の置かれた飛火野が転訛した地名といわれる。七里岩の台上ならば烽火台として適当であろう。

天保12年に編まれた『糸岡略伝・誠忠旧家錄義』という本に、「三吹村 中山右衛門政治、中山勘定由左衛門貞政、中山城ニ住ス、占城跡今尚存ス」とあるが、その歴史的根柢の見るべきものがない。中山という著名な山が近くにあり、これを苗字とする家数を見るに白州町83戸、武川村63戸、小淵沢町64戸となって、本県内で

最も濃密に分布する。しかし、中山氏という著名な人物が、武川衆の領袖にあったことは間かないが、武川60騎中に、中山を名のる武士がいたことは十分考え得る。中山砦の城番級の士であらうか。

(佐藤 八郎)

### 3. 調査の経過

本砦は1981(昭56)年3月26日・28日・29日、5月3~5日に間に調査された中世城館址である。

調査は武川村教育委員会・村誌編纂室より甲斐丘陵考古学研究会を中心とする中山砦発掘調査團に委託されたものである。

調査目的は、詳細な測量図を作成するとともに、遺構、遺物をとおした時代性を把握するためであった。調査方法としては、遺構の保存につとめながら調査目的を達成するためにトレンチ方式をとり、土壘によって区画された二つの

郭の内一つを調査することとした。また全体の遺構を把握するために発掘調査と並行して測量作業も行なうこととした。その結果、尾根切りや帶郭、堅堀を確認するとともに柱穴や土師質土器等を検出することができた。

#### 調査日誌

3月26日

調査区域の確認とクイ打ちを行なう。

3月28日

くわ入れ式

測量及び発掘調査開始。

3月29日

トレンチの表土のはぎとりを完了。

5月3日

測量・発掘作業をつづける。

柱穴らしきもの、土師質土器片を検出。

5月4日

同 上

5月5日



P.L. 3 ミーティング風景

土壌の構築方法を確認する。

測量を終了する。

(八巻与志夫)



P L. 4 測量風景



P L. 5 発掘風景



P L. 6 土壌たち割り状態

## 4. 層序

中山葵は、その立地が山頂であることと、皆構築の際の整地による削上・盛上によって、上層の厚さや分布に差異がみられる。南部に設定したトレンチの中で最も良好な堆積をみせるAトレンチ中央部北壁の層序を基本土層として把握した。以下に記すとおりである。

第1層 腐葉土層

第2層 黄褐色土層

第3層 "

第4層 明黄褐色土層

第1層 腐葉土層 表面は腐植しきらない枯葉に覆われている。Aトレンチでは、おおむね10cmの堆積であるが、Cトレンチでは2~4cmと薄い。しまり、粘性がなく、根の進入が著しい。

第2層 黄褐色土層 Aトレンチでは5~10cmの堆積であるがBトレンチ南端ではまったくみられない。Aトレンチ内でも北東半は、赤味がかったり、西南半と歴然とした差がある。A・B両トレンチの接する部分では炭化物の混入が目立ち、遺物が含まれた遺構の確認面である。

第3層 黄褐色土層 第2層よりも褐色味がなく明るい。ややしまりがあり10~20cmの堆積をもつが、Dトレンチではまったくみられない。風化の進んだ小石がみられる。

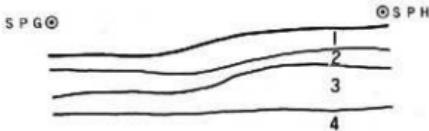


Fig 2 基本土層図

第4層 明黄褐色土層 地山である。径2~15cmの石が多量に含まれている。Dトレンチでは含有物は同様であるが、土壌の立ちあがり付近では部分的に暗褐色土が混じる岩盤となる。Cトレンチでは赤味がかったり点による変化が著しい。

(信藤祐仁)

## 5. 中山砦の概観

中山砦は、すでに述べたように、中山の山頂に構築されたものである。中山の山頂はもともと南北70m、東西20mほどに、なだらかになっていたものと思われ、南側と北東、北西の三方に長く尾根がのびているほかは、斜度40~50%の急斜面となっている。中山砦における造構のあり方は、この原地形を巧みに利用していて、基本的にはこの山頂平坦面に土壘をめぐらして郭を設け、三方にのびる尾根をそれぞれ掘り切って防御をかためるというかたちになっている。ここでは測量調査によって知られたところを測量図にもとづきながら説明していきたい。

土壘で囲まれた郭はほぼ中央でやはり土壘によって南北二つに大きく区切られている。いま二つの郭をそれぞれ「南郭」、「北郭」と仮称する。

「南郭」は今回トレンチ調査を行ったところ

でもある。西辺で高さ約1mを測る土壘は南辺で「く」の字に折れ、このあたりで1.5mあまりに高さを増すが、東辺にうつり、だいぶ低くなっている。土壘で囲まれた「南郭」内部はほぼ平坦で、12m×20mほどの広さをもつ。

「南郭」の南側には3mほど下って幅5m、長さ20mの「南腰郭」がある。さらに南に4m下って、「南腰郭」よりやや小ぶりの腰郭があって、ここでは山頂側が30~50cmの深さで三日月形に掘りくぼめられ、空堀状になっている。その先、「南郭」から60mのところで尾根を切断する堅堀が尾根の左右に下っている。山頂から南へのびる尾根の鞍部となったところで、「南郭」との比高は21mあまりである。この先には造構と思われるようなどころはなく、この堅堀が砦の南限と思われる。

「北郭」は内法で南北33m、東西5~10mで「南郭」同様に土壘がめぐるが、西辺土壘は杭Na4のところで若干内側に張り出している。また北辺では幅もせばまり、高さも40~50cmと低くなっている。東辺土壘には基底面の幅で2mほどに完全に切れている個所があり(杭Na9+の西側)、郭内部と東側の帶郭とを連絡している。「南郭」と「北郭」の間の土壘もほぼ中央(杭Na6付近)で低くなり両方の郭の通路となって



P.L. 7 虎口



P.L. 8 土壘構築状況

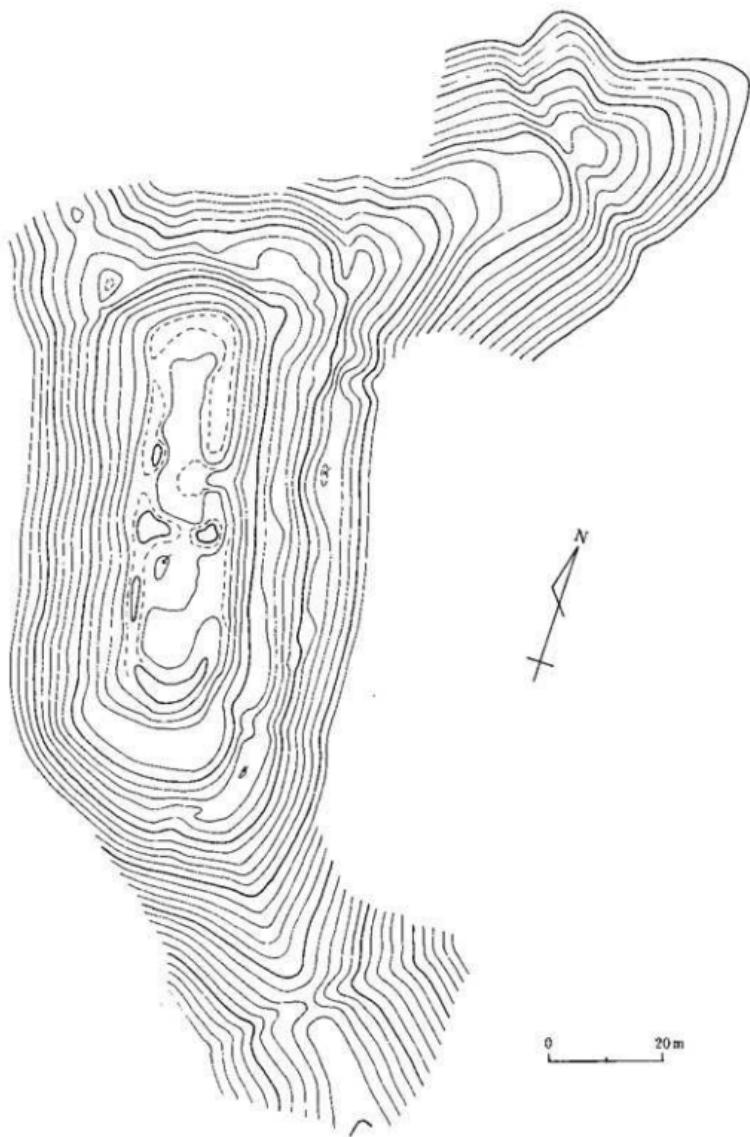


Fig 3 中山荘測量図（等高線は1m間隔）

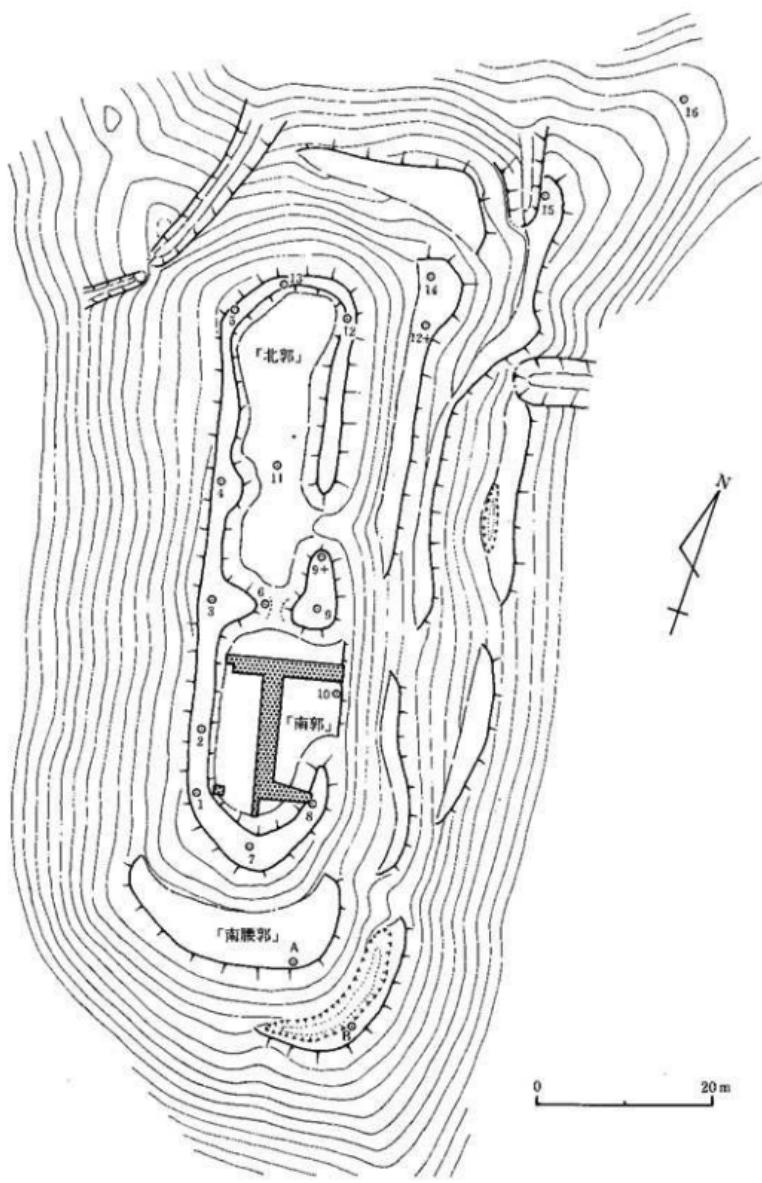


Fig 4 中山陵遺構概念圖

いる。この通路の左右の部分で土壌は最も高く、中山の最高地点ともなっていて、遠見台のような性格をもっていたようにも想像される。

「北郭」内部は、北から南へゆるやかな傾斜をもっているが、とくに杭No11の付近で比高50cmほどのゆるい段差が見られる。この段差は南北の土壌の張出しとも対応しているよう、「北郭」をここで南北二つに区切ろうとする意識がはたらいているかとも思われる。すなわち「北郭」は「南郭」内部と比べてもやや低く東と南に土壌が切れて、外側や「南郭」とつながりをもつ南北部分と、まわりの土壌も低く、土壌の敷数が狭いだけ内部が広くなっている北半部分とに分かれるようである（現に「日本城郭大系」8では「北郭」を二つの郭としてとらえている）。

「南郭」、「北郭」の東側斜面から北側斜面にかけて二～三段の帯郭が見られるが、反対の西斜面にはこうしたものは見られない。

「北郭」の北東隅の上壇上の杭No12から北東へ25m、高低差10mのところからは西側の沢に向って堅堀が下り、また同じく杭No12から東へ18m、高さで9mほど下った地点からも東へ下る堅堀が始まり、これは10mほどで自然の沢となっている。これらの二つの堅堀は連携して尾根上の移動を規制しているように見られる。

北東尾根には、この先さらに完全な尾根をきる幅5m、深さ2m（山頂側からみて）の堀切がある。この堀切から先には、尾根の西側斜面に比較的小規模な段々が5～6か所みられるが砦の遺構ととらえられるかどうか、いま少し検討を要する。

「北郭」北西隅から4mほど下ったあたりにも、幅4m、深さ2m（同じく山頂側からみて）の堀切が設けられ、遺構の西限となっている。

（出月 洋文）

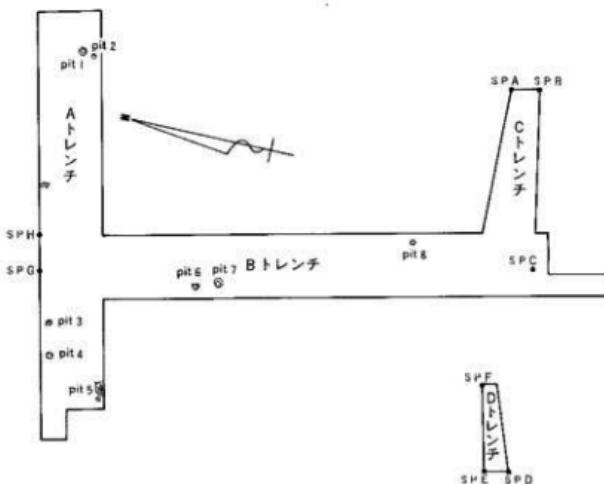
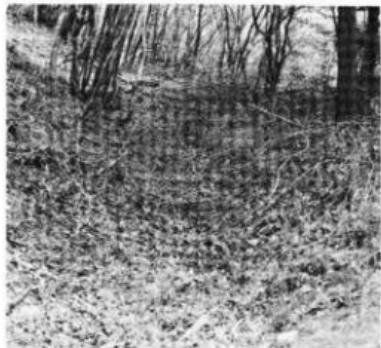


Fig. 5 トレンチ配置図



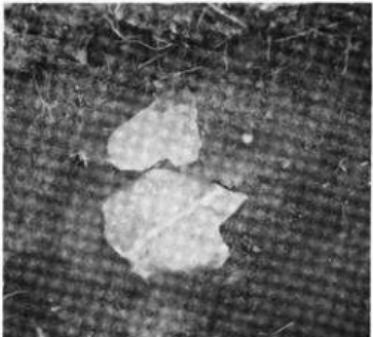
P L. 9 土壘下の腰郭



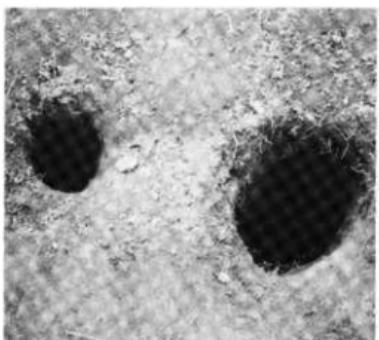
P L. 10 土壘下の腰郭



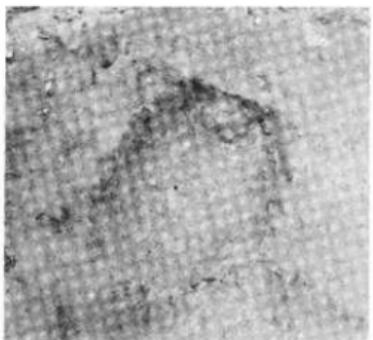
P L. 11 土 壘 上 部



P L. 12 碇石状の石



P L. 13 ピ ッ ト



P L. 14 ピ ッ ト

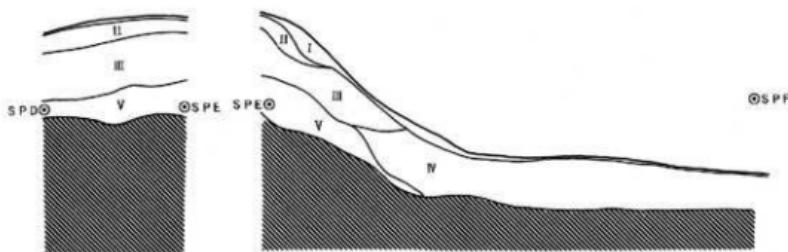


Fig. 6 Dトレンチ土壌セクション図



Fig. 7 Cトレンチ土壌セクション図(東)

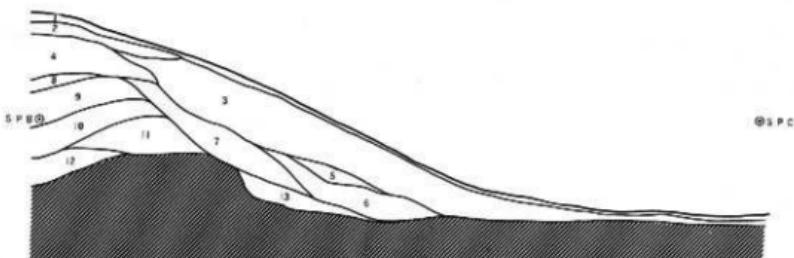


Fig. 8 Cトレンチ土壌セクション図(南)



P L. 15 南・北郭を結ぶ通路



P L. 16 北郭

## 6. 遺構

(発掘調査によって確認された遺構)

### A トレンチ

北東側の土壘の切れている部分に径22cm、深さ50cmのPit1と径15cm、深さ47cmのPit2が確認された。土壘が切れているところから構造的施設が構築されたであろうと想定され、その柱穴と考えられたが、この2個以外に発見はなく規則的に列をなさず覆土の状態からも明確な柱穴とは言い難く根による搅乱であるかもしれない。S P Bの東50cmの所には平板状の石2個が存在した。長さ28cmと18cmの平坦面を上面に配置したものである。礎石であると考えられ他にこのようなものは見当らないのが疑問であるが以前あった石を下に投げたという地元の人の話があるため偶然残ったものがこれのみであったようである。S P Gの南西1mに長径22cmの楕円形のプランを呈し深さ25cmのPit3とS P Gの1.5m南西の径20cm深さ10cmのPit4があった。Pit5は長径70cm、短径46cmの楕円形であり覆土は暗褐色土上で径1cmの炭化粒子がまばらに含まれて粘性はなく石が多量に含まれている。石は5~22cmと種々のものであるが岩盤などにみられ

る石とは異なり他から運ばれたものである。

Pit5の石の間とその周辺で唯一の遺物である土師質土器片が数点出土した。

### B トレンチ

S P Gより南に5mの所に径30cmと20cmのPit6、6mの所に長径50cm短径38cmのPit7が存在する。両方とも二層を掘り込んで構築されている。Pit6は2個の重複のようであり瓢箪形をしている。两者ともに茶褐色土層であり明確な区分はできなかった。深さは5cmと浅いものである。Pit7は楕円形を呈し深さは9cm、暗褐色土で小炭化粒子が多量に含有された覆土であった。

南郭のトレンチによって確認されたものは以上であるが、建物の構造まで推測はできないものの、掘立柱の建築物と礎石による建築物の二者があることが判明したが、時期差か性格差かは捉えられなかった。

### C, D トレンチ

これらのトレンチは、土壘の構築状態をみるために上壘をたち割る形で設定したものである。地山の黄褐色礎まじり土層は、Dトレンチ側では堅い岩盤となっているが、郭の内側は削平されて平坦になっている。第12層は旧表土と考えられる黒褐色土層であるが、この上部に削平さ

れた土が盛り上げられている。上層の断面を詳細に観察すると、第4・6・7層の下の土層との境目は、きれいな曲線をえがいており、中山砦の当初の土壁の表面であったと考えられる。第1～7層は、その後の補強のために盛り上げられ、現状を呈するのである。上層はこの構築状況から、築造された時期と補修増強された時期の二時期に区分できることが判明した。

(信藤 祐仁)

## 7. 遺 物

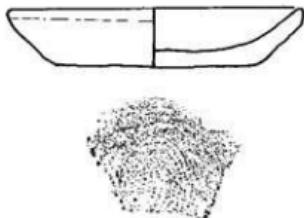


Fig 9 七跡質土器

発掘調査で得られた遺物は上師質土器片のみである。△トレンチ南西隅のピット5の覆土及びその周辺よりまとまって発見された。合計7片であり、復元実測の可能なものはただ1片のみである。これは口径8cm底径5.5cm器厚0.4～0.5cmの土師質土器である。やや赤味がかった褐色を呈しており、胎土には細かな長石や雲母粒子が混入されている。ろくろで製作され回転方向は右回りである。器面は平滑に仕上げられているが、他の小破片は風化によって表面がざらついている。

(信藤 祐仁)

## 8. ま と め

今回調査を実施した中山砦は、武川衆の拠点としてよく知られていたところである。したがって、戦国期における辺境武士団武川衆の実態、性格等を十分把握したうえで分析を進めなければならぬが、しかし短期間の発掘調査や測量調査を通していくつかの成果も得られているので、ここでは主として中山砦の立地、形態、発掘上の所見を中心にまとめていきたいと思う。

三吹中山の山頂に占地する本砦は、信濃との国境に近い要衝に位置し、すでに述べられてきたようにいわゆる武川筋や八ヶ岳南麓台地から七里岩上に連なる広大な土地を望むことができる。この交通や支配の要衝という恵まれた立地環境が本砦を築造する基本的な条件となっている。

さて中山砦の形態をみると、概観の項で記されているように第一に南北2つの郭によって構成されていることを特徴としている。この形態は近くには小淵沢町の笹尾砦の内郭部に酷似し、また多少形態、規模の相異はみられるが長坂町の深草館、甲府市の湯村山城でもみられ、砦の形態とすれば比較的多い。また本砦はこの2つの郭を核としてその周囲に帯郭や堅堀、尾根切り等の防衛施設を配する構造である。すなわち山頂より南、北東、北西の三方にのびる尾根上にはそれぞれ堅堀や堀切で防衛を固めており、これを城城としながらまたこの三筋を城への登り口にもしているのである。帯郭は主郭の東側斜面から北側斜面にかけて二、三段設置しているが、西斜面にはあまりみかけることができない。このように一方に片寄って帯郭を配置する

傾向は、前述の篠尾砦や甲府湯村山城、甲府要害城でもすでに知られている点であり、帯郭のもつ防御的性格とあわせて注目される。帯郭は防御すべき方向と連関してとくに付設される傾向の強い施設と考えられ、のことから本砦は釜無川沿岸台地にむけて防御意識が働いていたとみることができる。

二つの郭のうち、「北郭」の西辺土塁が内側に若干張り出す特徴もみられる。これに相関するように郭内に段差もみられるが、單に郭内の整地という意味あいの他に、「北郭」を南北二つに区切ろうという意識のあらわれとみることができる。本砦をながめた場合、細長い山頂平坦地を一つの土塁によって二つの郭に画しているのであるが、さらに小土塁や段差をつけることにより郭を分画する傾向は県内でも勝沼氏館跡の内郭部土塁状造構、蘿躑ヶ崎館の東・中郭を分断する土塁の存在、篠尾砦の上塁突出部と郭内の段差など例も少なくない。このような傾向が中世の城郭に多い特徴点かどうか今は論することはできないがこれらに関連して柵、へい等の区画施設が設けられていた可能性も考えることができる。

次に、今回の発掘調査によって得られた所見を述べてみたい。そのひとつは土塁の構築手法である。土塁に盛りあげられている土はおそらく郭内の土を削平し利用したのであろうが、土塁の断面図を見る限り二度の盛り上げが予測されている。一度土塁を築いたのち、さらにその上に積み重ねるように土盛りを行い、土塁を再構築しているのである。かりにこれが時期を隔てた二時期の所産とするならば、本砦は築造時期と修築時期の二時期にわけて歴史的にも把握していくかなくてはならないであろう。

郭内から検出した遺構は少ない。トレンチによる発掘面積が $150\text{m}^2$ と狭いこともあるが、やはり遺構そのものの希薄さによると思う。平ら

な石二個とピットだけであり、いかほどの建物が存在したであろうか。土師質土器數片という遺物の状況とてらしてもやはり簡単な建物を想定し得るのみである。先にあげた篠尾砦の場合もほぼ同じような傾向を示しており、これが砦の一般的性格と考えたい。

中世城館はそれぞれ有機的な結合意識をもちらん存在することはよく知られている特徴だが、本砦も武川衆の拠点のひとつとして他の城館と連関して警固されてきた。しかし平常時に多數の人々が詰めていたとは今回の調査でも想定はできないし、軍事専用の城館ということが明らかになった。遺構、遺物の出土傾向と、半面土塁、堀等の防御機能が著しく発達している点から、いわゆる生活空間の確保よりも防衛意識の強い砦として、その機能を十二分に發揮していることがうかがわれるるのである。

また砦は、そこに住する地域の人々によって警固される傾向が強いが、本砦は横手、柳沢、三吹の三方から登ることができ、この三地域に割換する武士團によって守られていたと推定できそうである。これは辺境武士團武川衆の性格を探るうえで興味ある事例である。

(萩原 三雄)



P.L. 17 調査参加者

## —おわりに—

山梨における中世城館址の発掘調査は、その城館址の数300余といわれる実態に比して、きわめて少ない。

今回の中山砦の調査は部分的であり、十分な成果があつたとはいいがたいが、詳細な実測図作成は、今後の城館址研究のうえで貴重な資料提示ができたと考えるものである。

さて、本県において考古学的分野からの城館址研究は近年大いに進展している状況にある。1973年の勝沼氏館（勝沼町）の発掘はその端緒を切り開いたものとして評価されているが、以後、10年ほどの間に日ノ出砦（韮崎市）、岩崎館（勝沼町）、鷹岡ヶ崎館（甲府市）、笠尾砦（小淵沢町）、深草館（長坂町）、谷戸城（大泉村）、若神子城（須玉町）、勝山城（中道町）、中尾砦（須玉町）、南部氏館（身延町）、小和田造跡（長坂町）等の発掘調査がある。これらは全面発掘よりも部分発掘が圧倒的に多く、全容を理解することは困難であるが、遺物・遺構の類例も増え、着実に中世城館址研究の前進を指摘することができよう。しかしこれらの多くが開拓による事前の発掘調査であることと今後の問題点も残されている。

一方、御坂城（河口湖町・御坂町）、小山城（八代町）、谷戸城（大泉村）、新府城（韮崎市）、勝山城（都留市）、於曾郡敷（塩山市）、勝山城（中道町）などで実測図作成が行なわれていることは、城館址研究や文化財の保護、活用の面からも大いに評価される内容のものである。

最近、考古学の分野では「歴史考古学」がいわれているが、考古学的手法を駆使して中世城館址研究を進めてきた私ども甲斐丘陵考古学研究会にとって、文献史学との連携が重要であることを深く認識している。今回の中山砦の発掘調査では、磯貝正義・服部治則・佐藤八郎・上野晴朗の諸先生方より御指導を得ながら調査できたことは幸いであった。

甲斐の山野に埋もれた、烽火台・砦・館・屋敷・山城などの中世城館址に対して、地域の歴史を解明する立場から、さらに共同研究を進めて行きたいと考えている次第である。

なお、調査にあたっては、武川村当局、村誌編纂室、教育委員会並びに地元の方々に多大な御協力をいただいた。末筆ながら心から感謝の意を表するものである。

（田代 孝）

## 武川村中山砦発掘調査団組織

### 代表調査員 磯貝正義

### 調査員

佐藤 八郎	野沢 昌康	服部 治則
上野 晴朗	清雲 優光	田代 孝
萩原 三雄	小野 正文	早川 方明
室伏 徹	八巻与志夫	出月 洋文
数野 雅彦	信藤 楠二	猪股 喜彦
川口 純一	土屋 政司	志村 富二
佐野 勝広	日向 千恵	山田 周平
山根 弘人	平山 優	

### 調査協力者

野本嘉高（教育委員長）	小沢芳武（教育長）
與石恭雄（村誌編纂室）	長坂剛（同）溝口正輔（同）
與石圭俊（教委事務局係長）	中山嘉明（村誌編纂委員）
武藤保長（下三吹区長）	

下三吹区の方々

## 武川村中山砦発掘調査報告書

発行日	1984年4月10日
編集者	中山砦発掘調査団
発行者	武川村誌編纂室
発行所	まいづる印刷

